

学びの風便り

リーディングスクール通信26 R6.8.15

発行：松本市教育委員会 教育研修センター

特集！学びの改革のあゆみ 女鳥羽中学校・波田中学校

女鳥羽中学校 「本当に自由に学べる学校」をみんなで創る

スタートは実践への問い直しから

女鳥羽中学校の研究（学校づくり）テーマの決めだしにあたっては、先生たちのこれまでの実践への「問い直し」がありました。

- ・私たちは、生徒たち一人一人の学びをわかろうとせず、「わかっている」「できる」「声を発せられる」生徒のみを見て授業を進めてきたのではないか？
- ・それにより生徒が息苦しさを感じる環境を作ってしまったのではないか？
- ・授業を、誰もが尊重されその子らしい学びが対等に保証される「自由」な場にするには？

こうした課題意識を共有し、今年度のテーマ「本当に自由に学べる学校」が決めだされました。

授業観・子ども観を共有する

5月8日、今年度初めての全校生徒集会「相互理解集会」が行われました。全校の生徒たちが事前にアンケートに記入し、進行役の生徒会役員が前もって発言の依頼をする等、誰もが安心して思いを発表できるよう、配慮しながら準備を進めてきました。「されて嫌な思いをしたこと」（前半）、「してもらってうれしかったこと」（後半）の語り合いの中で、生徒たちはしっかりした言葉で「思い」を開示し、その一つ一つの言葉に全校のみんなが耳を傾けました。多くの生徒が「また語り合いたい」と振り返る、思う温かい会になりました。

放課後、先生たちは「車座」になって集会で感じたことを語り合いました。

- ・この生徒がこれほど語れる「思い」を持っていることに、わたしは気がついてたか。
- ・何が、この子の表現を引き出していたのか。
- ・一人一人の「学び」を理解するにはどうすればいいのか。

「思い」に関心を向けた対話は、先生たちが「授業観・子ども観」を共有する機会となりました。

実践の広がりや積み上げ

取組の方向を共有した先生方は授業実践への挑戦を重ねています。そのうちの2つをご紹介します。

◇自由進度学習にチャレンジ



新卒3年目の先生が「単元内自由進度学習」（社会科）に挑戦し、全校の先生方が参観しました。九州地方について、各生徒が着目した「自然の特色を生かした営み」について、考えをまとめ表現する授業。どの生徒も自分の「まとめ」にこだわりを持ち、粘り強く向き合う学びの姿がありました。

放課後の「車座」研究会では、先生方から、生徒たち一人一人の具体的な姿とそこから感じられる「学び」が豊かに語られました。多くの先生から「主体性」の具体が語られ、互いの「子ども観」をさらに深める機会となりました。

◇探究的な学びへの挑戦

テーマや枠組みが決められた「用意された活動」に取り組む形で行われてきた、これまでの「総合的な学習の時間」を見直し、「生徒自身が追究したい『問い』を見出し、学び方も自ら考え、学んだ結果を様々な方法で表現する『探究的な学び』」に踏み出しました。名付けて「プロジェクトM」。

学習オリエンテーション通して、学びのイメージを共有したり、地域でどのような「学び」が成立できそうか、フィールドワーク（教材研究）をしたり等、「自由で主体的な学び」に向けて先生たち自身が「新たな学び」に挑戦しています。

（取材・構成：大久保和彦）

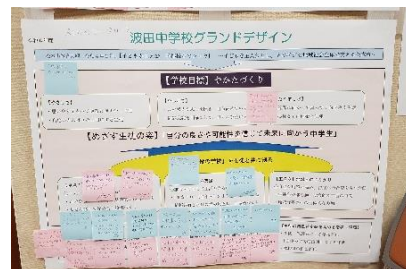
波田中学校 「全員が主役の学校」を目指して 1学期のあゆみ

県のパイオニア校として、2年の目を迎える波田中学校。今年度は『全員が主役の学校』を生徒と共に創ることを目指し、主に日々の「授業の充実」に視点をあて実践を進めています。

職員研修を通して、「主役」の意味を考え合う！

「全員が主役の学校」を実現するためには、先生方のお互いの考えを共有していくことが大切だと考え、6月の職員研修では、波田中のグランドデザインが記された模造紙に付箋を貼りながら、日々の「授業充実」のために工夫したり実践したりしていること、授業を行わない先生方は「主役の学校」をつくるために行っていることなどを、小グループで交流し合いました。先生たちは、付箋に「声がけ、『どうしてだろうね〜、これわかったらすごいね〜』からのグループワーク、友との対話」「数学の授業を実際にみにいく。ちょうもしろいから」「とにかくほめる（ほめつつ、より改善できそうなところを伝える）」など、思い思いの考えを記し、貼りながらその理由を説明していききました。

7月の職員研修では、「全員が主役の学校」をつくるために、自分が実践してきたことを持ち寄り語り合いました。板書写真や生徒が4人グループで話し合っている写真をもとに実践を振り返る先生、タブレットで授業の録画を示しながら生徒の様子を語る先生、自分が出している通信をもとに日頃心がけていることを語る先生など、発表の仕方も様々です。学年や教科を超えて日頃あまり話さない先生方と語り合うことを通して、職員全体で「全員が主役の学校」の意味についてお互いの考えを共有しながら、少しずつ同じ方向に歩んでいけるようにと研修を重ねています。



授業の充実へ向けてⅠ ～研究通信で先生方の授業の様子を紹介する～

「授業をお互い気軽に観る機会があればよいのですが、時間的に難しい面もあります。そんな先生方の参考になればと、他の先生方の授業の様子や先生方が大切にしているポイントを研究通信で紹介するよう心掛けています（7月末で19号）」と語る研究主任のF先生。授業を観に行くことができない時は、録画を観て、授業を紹介することもあるそうです。「突撃！〇先生の授業を見せてください」「子どもたちを自然と学びに誘う教室づくり」など様々なコーナーを設けて、先生方の実践を紹介しています。「全員が主役の学校」に向けて、多くの先生方が「日々の授業」を見直したり、他の先生方のよい点を学び合ったりする機会になれば願い通信を書いているそうです。多くの先生方にとって、「全員が主役」の授業を目指し実践していく羅針盤になっているのではないのでしょうか。



授業の充実へ向けてⅡ ～授業実践から学ぶ～

「今年になり今まで以上に、今日、この子は主役になれたのかな？と振り返る機会が増えてきた」と語るF先生。今年度は、机をつけて4人グループで授業を行う先生が増えたそうです。一斉指導では「全員が主役」の実現は難しく、お互いの考えを交流しアイディアのよさを学び合ったり、わからないことを聞き合ったりすることが大切だと先生たちが思うようになったからではないかとF先生は考えています。4人グループの机の形も、全員が前を見やすくなるようにT字型にしたり、全員が真ん中を向けるように風車型にしたりと、先生たちが様々な工夫をしているといいます。



7月中旬には、初任3年目のK先生から「英語の授業をみに来てください」という依頼が研究主任F先生にありました。授業の冒頭、ロックバンド演奏と共に流れた映像は、「K先生のドラムの動画」です。ドラマーK先生の映像を食い入るように見て、英語の授業に入り込んでいく生徒たち。授業は、「書くこと」「話すこと」「読むこと」の流れになっていました。特に「話すこと」の活動では、ペアワークを行い、自分の考えをお互い交流し合うなど、「全員が主役」の授業を目指し工夫されていました。波田中学校では、K先生のように「自分の授業をみてほしい」とお互い言える雰囲気大切に、2学期は授業実践から学ぶ機会をより多くもてるよう計画しています。

